

旧帝国大学採鉱・冶金系学科「実習報文」一覧 (1879-1950年)

池上, 重康
北海道大学大学院工学研究科

砂本, 文彦
広島国際大学

中江, 研
神戸大学

角, 哲

<https://doi.org/10.15017/4261>

出版情報：エネルギー史研究：石炭を中心として. 22, pp.21-29, 2007-03-27. Manuscript Library,
Business and Economics Section, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



【資料紹介】旧帝国大学採鉱・冶金系学科 「実習報文」一覧（1879年～1950年）

池上重康・砂本文彦
中江研・角哲

はじめに

日本近代の鉱山（石炭山、金属山ともに）研究の基礎資料として、旧帝国大学など高等教育機関の採鉱・冶金系学科の学生が執筆した「実習報文」¹⁾を用いた研究をよくみかける。大抵の場合は、単一の鉱山において、特定の年代の状況を把握するために用いられ、各々の研究者が手近に見ることができる大学に所蔵されている「実習報文」を閲覧しているようである。数多ある「実習報文」のうち、研究の目的に沿ったものに辿り着くために、当紀要の編集・発行母体である九州大学記録資料館の前身である旧石炭資料センターの編纂による『九州石炭礦業史資料目録』²⁾掲載の「実習報文」の目録は、現在、有用な道標といえる。これまでにまとめられている「実習報文」の目録は、以下に示す通りである。

「九州大学工学部採鉱学科学学生実習報告（及び卒業論文）目録」

（『九州石炭礦業史資料目録』第6集、1980年、pp.325 383）

「九州工業大学工学部開発土木工学科実習報告目録」

（『九州石炭礦業史資料目録』第9集、1983年、pp.203 292）

「大阪大学工学部所蔵採鉱冶金学科関係実習報告・卒業論文目録」

（『九州石炭礦業史資料目録』第9集、1983年、pp.295 325）

「東京大学工学部資源開発工学科所蔵学生実習報告目録」

（『九州石炭礦業史資料目録』第10集、1984年、pp.273 323）

「東京大学工学部金属工学科所蔵学生実習報告及卒業論文目録」

（『九州石炭礦業史資料目録』第11集、1986年、pp.329 344）

ところで、筆者らは2005年から2006年にかけて、(財)住宅総合研究財団の研究助成を受けて、「日本近代鉱業系企業社宅街に関する研究——鉱山系高等教育機関の実習報文を基礎資料に——」を行なった。研究課題の副題に示すように、「実習報文」を基礎資料に、横断的に、かつ俯瞰的に、鉱業系企業が開発・運営した社宅街の展開を見ようというものである。もっとも、研究の本義は、こういった研究を行なうために「実習報文」はどれほどの資料的価値を有しているのかを検証することにあつた。

全国の鉱山を網羅的に見たいという観点から、閲覧する「実習報文」を旧5帝国大学に限定した。即ち、北海道大学、東北大学、東京大学、京都大学、九州大学である。また、年代は、当初、企業による社宅政策が転換期を迎える1970年までを予定していたが、予算的、時間的制限により、戦後の傾斜生産政策が終焉する1950年までとした。

お気づきのように、北海道、東北、京都の各大学の実習報文は、『九州石炭礦業史資料目録』には採録されていない。本来であれば、ここの紙面をお借りして、全目録を掲載すべきなのであろうが、今回は、閲覧できた「実習報文」を横断的、俯瞰的に見るために作成した一覧表のみを提示することをお恕し願いたい。なお、北海道大学の「実習報文」の一覧は、『北海道大学大学文書館年報』第2号（2007年初頭刊行予定）に掲載の確約を得ている。九州大学では大学文書館が所蔵しているように、「実習報文」は大学史を語る資料としてもその価値を認められつつある。東北大学および京都大学の「実習報文」リストについては、それぞれ東北大学史料室、京都大学大学文書館の刊行物への掲載を打診している。

1. 鉱山実習と旧帝国大学所蔵の実習報文

鉱山実習とは、旧帝国大学（以下、帝大）や工手学校など、高等教育機関の採鉱（あるいは鉱山）・冶金学科の学生が主に夏期休暇を利用し、各自割当てられた鉱山や精錬工場などで生産システムを体得する現地実習である³⁾。また、旧帝大所蔵の「実習報文」とは、大学から派遣された実習生が、実習期間中に収集した採掘法や換気法、坑内外の図面などの資料や各種データを整理し、大学に提出した報告書のことである。この報告書は卒業論文に準じるものとして製本され、保管されている。

今回、閲覧した「実習報文」の作成組織と現在の所蔵場所は表1に示す通りである。このうち1950年までの2,831冊を閲覧し、整理・分析した⁴⁾。1879年から1950年までの「実習報文」を鉱山毎に地域に分け、年代順に所蔵状況をまとめたものを表2に示した。

鉱山実習を行なう実習生、中でも大学生は、職員合宿所に宿泊して実習を進める場合が多い⁵⁾。彼らは将来の企業幹部となるべき立場にあるため、実習報文の内容は、生産システムの記述がメインであるが、会社組織や労務、坑外施設などにも触れ、さらに、将来の管理者としての実習生

表1 旧帝国大学採鉱・冶金学科「実習報文」の作成組織および現在の所蔵場所

作成組織	作成期間	冊数	現在の所蔵場所
北海道帝国大学鉱山学科	1926年～現在	328	北海道大学工学部社会工学系(旧資源)図書室
東北帝国大学金属工学科	1926年～53年	247	東北大学工学部図書館
東京帝国大学採鉱学科	1899年～現在	715	東京大学工学部地球システム図書室
東京帝国大学冶金学科	1878年～1916年	252	東京大学工学部マテリアル工学図書室
京都帝国大学採鉱冶金学科	1899年～1965年	883	京都大学工学部地球系図書室
九州帝国大学鉱山学科	1914年～現在	406	九州大学大学文書館

北海道帝国大学冶金学科と、東北帝国大学鉱山学科の実習報文は廃棄処分され現存しない。
1950年までの閲覧した冊数を示す。

表2 (別表)

北海道	上赤平 [k=21] 油谷芦別 [d=49] 豊羽 [tk=19, t=41, k=42] 様似 [k=21] 来馬 [k=35, 36] 釧路 [k=22] 岩尾 [y=22] 後志 [k=08] 別保 [k=21] 虻田 [t=19] 手稲 [d=39, 45, 46] 庶路 [d=45, 48, 49] 昭和 [d=32, 49, 50, y=39] 日東 [k=40] 築別 [dk=48] 稲倉石 [t=43] 日本製鋼所 [h=49] 若菜辺 [d=29] 真谷地 [t=25, k=29] 日曹天塩 [d=50] 雨電 [d=46]
青森	北上 [k=44, t=48, 50] 西又 [k=19] 若瀧 [k=19] 安倍城 [k=14, t=16, 18]
岩手	鷺ノ巣 [k=06, 13] 卯根倉 [t=19] 大萱生 [d=15] 松尾 [k=38, 41] 田老 [k=39, tk=41] 大川目 [k=41] 網取 [t=20] 大荒沢 [t=19] ラサ工業 [h=40]
宮城	大谷 [k=06, y=20] 東北帝大 [h=31]
秋田	黒川 [k=22] 由利 [d=31] 日三市 [k=09, t=15] 松岡 [t=1895, 1898]
山形	木友 [k=48] 見立 [t=31] 大蔵 [y=1896, k=1898, t=1899]
福島	町田 [d=06, t=23] 勿来 [d=50] 八重 [k=15, 18]
栃木	西澤 [k=11, 19, t=18] 日光 [k=13] 木戸ヶ沢 [k=17]
東京	中島飛行機 [h=33] 東京工廠 [h=32] 石川島 [h=31, 33] 日立亀戸 [t=27, h=49] 芝浦製作所 [h=37, 38, 40] 日本高周波 [h=50] 新理研工業 [h=50], 特殊製鋼 [h=31] 大同電気築地 [h=33]
神奈川	鶴見造船 [h=38] 鶴見造船 [h=38] 富士製鋼所 [h=38] 日本鑄造 [h=39, 40] 特殊製鋼 [h=39, 40] 海軍工廠 [h=40, 41] 日本鋼管 (横浜・川崎) [h=41, 49, 50]
新潟	持倉 [k=15, t=19] 新潟鉄鋼 [h=41, 49] 理研工業 [h=49] 橋立 [k=04]
石川	小松製作所 [h=40]
福井	面谷 [t=1888, 1894, 16] 中龍 [k=38] 文室 [k=39]
岐阜	福岡 [k=19, y=22] 天生 [k=38] 平金 [k=05, 10]
静岡	峰沢 [t=15, k=17] 土肥 [dy=39] 河津 [d=39] 大松山 [k=12] 蓮台寺 [k=19]
愛知	熱田兵器 [h=36]
三重	水沢 [k=11] 紀州 [d=42, k=48, 49] 薬師 [k=50]
兵庫	多田 [t=1879, k=08] 但馬 [k=39] 夏梅 [k=39] 庄野 [k=42] 中瀬 [k=50] 川崎造船 [h=36, 37] 特殊製鋼 [h=39] 竹野 [k=00]
大阪	日亜製鋼 [h=49, 50]
和歌山	飯盛 [k=20, 34]
鳥取	岩美 [t=29, k=36]
島根	久喜 [k=03, 04] 鋼ヶ丸 [k=04]
岡山	帯江 [k=01, t=15, 17] 三井物産造船部 [h=32]
広島	呉海軍工廠 [h=41] 三原 [k=07] 甲山 [t=1898]
山口	本山 [y=47] 大浜 [y=47] 大嶺 [k=40]
徳島	持部 [k=08, 11]
香川	直島 [h=29]
愛媛	愛媛 [y=11] 大瀬 [k=12] 川山 [k=12] 市ノ川 [t=1879]
福岡	笹原 [y=47] 稲築 [d=42, y=48] 綱分 [y=49] 早良 [y=42, y=50] 志免 [y=47, 49, k=50] 吉隈 [y=48] 宝珠山 [y=37, 47] 芳雄 [y=47] 星野 [k=40] 赤坂 [y=36] 平山 [k=39, 44] 勝野 [t=1899, k=08, 12] 新原 [k=11] 新手 [k=1899] 宇美 [k=1899] 大藪 [k=1899] 桐野 [y=16] 本洞 [t=11, y=16, 18] 大根土 [t=24] 神の浦 [k=17]
佐賀	香春 [k=07] 北方 [y=48] 西杵 [y=44, 46, 47] 佐賀 [y=22, t=23, k=44] 岩屋 [y=31] 唐津 [t=41, y=48] 古賀山 [tk=20] 多久 [k=21] 日炭山田 [y=46, 48]
長崎	福島 [k=20] 伊王島 [y=48] 江迎 [y=48] 大島 [y=47]
熊本	五木 [t=01]
大分	佐賀関 [h=29] 尾平 [y=41] 鶴成 [k=07] 馬上 [t=20]
鹿児島	布計 [k=04] 牛尾 (大口を含) [k=05, 08] 鹿籠 [k=08] 山ヶ野 [k=09, 11]
台湾	端芳 [k=06] 基隆 [y=01, 12, k=06]
朝鮮	桃花 [k=35] 光陽 [t=30, 35, y=41] 新興 [t=31, 33] 平壤 [t=15, 20, 26] 雲山 [t=1898, 18, y=05, d=38] 尚州 [t=13, y=39] 西安 [d=38, 39, y=41] 大楡洞 [d=39, dty=40] 茂山 [t=43, y=44] 遂安 [y=42] 阿吾地 [y=39] 橋洞 [y=37] 上東 [t=43] 黄海道 [t=1898, t=17] 龜城 [t=17] 金堤 [t=12, 32] 固城 [t=01]
満州	満州 [d=30] 兼二浦 [h=27] 阜新 [d=39, ky=41] 弓張嶺 [y=37, d=39, k=41] 楊家杖子 [d=39, dk=40, y=41] 大栗子 [t=40] ミヨルコ [k=12]
樺太	オハ [t=29]
中国	樂山 [y=42] 章邸 [k=20] 煙台 [k=02] 高飛里 [y=37]
マレーシア	ジョホール [k=07]
不明	大城 [t=1899, d=14] 尾子 [k=00] 弁財天 [k=07] 出雲 [k=04] 芦ヶ野 [k=06] 時任 [k=07] 鐘崎 [k=08] 大蔵山 [k=10] 井田 [k=11, 18] 三ツ沢 [k=13] 上馬 [k=19] 赤坂 [tk=20] 峰ノ裏 [y=18] 豆田 [y=19] 河鹿 [k=22, d=31] 桂 [k=02] 本邦 [k=09, 13] 三成 [k=13] 日東クローム [k=13] 富士製鋼 [h=27] 沙小口 [h=30] 漆逢 [t=02] 山鹿野 [t=15] 高坂 [t=14] 花川 [t=04] 光成 [t=12] 成与 [t=13] 礪津 [d=38] 高原 [y=40]

1. 本表は、実習報文の背景紙に記載の実習先を元に作成した。但し、戦中期には時局を反映して実習報文の内容を含みながらも実習先が示されないものもあり、本表の対象外とした。また、風洞実験など、本稿でいう実習報文の性格と大きく異なるものも対象外とした。このほか、実習報文の所蔵状況が3カ年以下のものについては、別表に示した。
2. 表中のアルファベットは所蔵大学を示し、北大は 'd'、東北大は 'h'、東大は 't'、京大は 'k'、九大は 'y' とした。但し、同一年度に、同一大学の学生による、同一鉱山に関する複数の実習報文が所蔵されている場合があるが、冊数は反映していない。
3. 一つの山に複数の企業が集中することがあるため、「鉱山名」は母体を主体に分類した。
4. 「坑口」は、実習先が大学や時代により異なり多岐にわたる場合が多いため、別注として記した。また、同じ坑口でも、表記が「採炭所」や「坑」、「礦業所」など複数みられるので、全て「坑」に統一した。
5. 「事業主」は、大規模な採掘が行なわれた戦中期を中心に記述し、開坑直後の個人経営期や終戦後の財閥解体期の状況を反映していない。
6. 「種別」は代表的なものを示し、石炭は 'C'、金は 'Au'、銀は 'Ag'、銅は 'Cu'、鉄は 'Fe'、鉛は 'Pb'、製錬は 'Me' としたほか、複数の鉱物が産出される鉱山を特に非鉄金属山として扱い 'NF' とした。また、製造業については 'IN' とした。
7. 所蔵状況の一覧の年代は西暦で示し、「19xx年」の 'xx' のみを表記した。また、それ以前については '18xx' と表記した。

注 「鉱口」の各注は以下の鉱山、坑口、製錬所、製鉄所を含む。*1萬字、新幌内、布引 *2本坑、萬字、最上、天龍、北上、丁末、新坑、石狩、橋立 *3南部・鹿島(北部)地区、新坑、*4空知、歌志内、赤間、神威、*5第一～第五、第七、*6堅坑、*7第一～第三、常盤台堅坑 *8第一、第二 *9赤平、上歌志内 *10第一 *11五号、元山 *12雄別本坑 *13製鐵所 *14二貫目区 *15石切沢 *16巒南斜、高坂、第二磐城の長倉 *17本山 *18堅坑 *19製鐵部 *20本山、通河、製錬、冶金 *21本山 *22栃洞坑、鹿間選礦場 *23選礦場、製錬所、太盛 *24新坑 *25犬島、佐島 *26本山、東平坑、新居浜選礦場 *27第一、第六 *28第一～四坑、小舟 *29宮原、三川 *30製鐵所 *31嘉穂、上穂波 *32第七 *33第一、第五、第六 *34第一、第三 *35本坑、第一～第三、八尺 *36第一～第三 *37堅坑 *38第一、第二 *39第二目尾 *40第二、第三 *41第一 *43堅坑 *44第一 *45第三 *46第三、第四 *47第一、第二、浅浦、蠣浦 *48二子 *49万田、新万田 *50第二、万戈(方) *51老虎台、東郷、大山、古城市、龍鳳、塔連、大正、萬達屋、東ヶ岡露天、万達屋、楊粕堡、千金塞、新屯 *52後の昭和製鋼所 *53第四、第一卸

自身の個人的な関心が現れる。時には、所属大学のOBとの会話の中で得た鉱山の実態や、労働状況への批判、倶楽部での幹部職員との会食の感想など、実習内容が赤裸々に綴られることもある⁶⁾。

実習報文は、当初は大学によりその内容が異なっていたが、時代が下ると、記述内容に大差は見られなくなる。また、先行して提出された報文を参考にした旨が書かれることもあり、大学によっては雛形も存在する。1937年に作成された北大の実習報文に所載の目次雛形は以下のようである⁷⁾。

1. 総論 (位置、沿革、鉱産額、管理)
2. 地質および鉱床
3. 探鉱
4. 掘盤および発破
5. 開抗および探掘準備
6. 採掘
7. 支柱
8. 運搬
9. 排水
10. 照明
11. 通気
12. 保安
13. 選鉱域の選炭
14. 製錬法
15. 動力
16. 坑外諸設備 (坑外図、工場、倉庫、物品配給所、病院、社宅及び集会所)
17. 労働 (鉱夫の種類及び人員、鉱夫の能率及び賃金、鉱夫の保険及び福利施設、鉱夫の教育指導機関、諸種の会合又は組合、労働に関する諸規則)
18. 鉱山管理 (管理の組織、各係の任務、勤務時間、能率増進法、鉱山の年中行事、その他)

我々の関心が社宅および社宅街にあるため、以下の記述は、こういった関連事項に偏ってしまうが、「実習報文」を、読み解くための一つの方法論ということでご理解いただきたい。

以上の項目中、社宅を含む福利施設の記述が見られるのは、「坑外諸設備」、「労働」、「鉱山管理」の章である。このうち「坑外諸施設」では、福利施設の種類、棟数、戸数のほか、「坑外図」という名目で配置図が添付されていることもある。この坑外図は美濃紙にトレースしたものや企業から提供された青焼きの場合もあり、社宅が記されていることが多い。中には社宅の種類や管理番号、隣棟間隔を記入しているものもある。「労働」の主だった項目は鉱夫の種類や賃金などで、福利施設として病院の診療の種類、労働者の教育などを記述していることもある。これらは労働をサポートする施設と位置づけられ、記述はソフト面に中心を置く。「鉱山管理」では会社

組織のほか、年中行事についての記述もある。福利施設の記述には乏しいものの、鉱山生活の一端を垣間みることができる。

九大の雛形⁸⁾では、「16. 鉱山組織及鉱業費」の章の鉱山組織の節に「鉱山事務・労働者（種類、員数、傭聘、労役、賃金及支払法、待遇、扶助等）・住宅（職員住宅、鉱員住宅）・鉱山特設教育機関・鉱山特設衛生設備・鉱山特設娯楽機関・其他、鉱業費、意見」とあり、項目名に違いはあるものの、内容は北大とほぼ同じである。しかし、ここでは福利施設がより細かく分類されている。

2. 実習報文の資料的価値

社宅街研究における実習報文の資料的価値は、第一に、大学における継続的な報告であるため、社宅や社宅街の経年的な変化を追えるという点にある。また、従来から存在は知られているものの、作成年が不明であった資料の年代を特定することができたり、これまで見られなかった新規資料を確認できることもある。新規資料とは、存在が確認されていなかった企業の内部資料だけでなく、写真機を持ち込んだ学生が撮影した写真なども含む。二点目として、こうしたハード面ではなく、将来の幹部職員候補でありながらも、第三者の視点で社宅運営の問題点を指摘したり、今後の開発の計画意図に言及するといった、ソフト面に関する記述を確認できることである。これまでの社宅街研究は、図面資料や遺構などからの考察が主であった。また、工業系企業社宅街を含めても、その計画意図を把握できるものは、黒沢貞次郎、大原孫三郎、鷲尾勘解治らが開発した社宅街に限られていた⁹⁾。

実習報文の資料価値はもちろん社宅街研究に限られるものではなく、九州大学所蔵実習報文について書かれた以下の記述によっても確かめられる。

「この実習報告は当然採鉱技術に関する報告が主体となっているが、それにとどまるものではなく、その鉱山の経営・労働にまでわたるものが少なくない。また実習学生を受け入れた鉱山は当時の代表的鉱山であること、学生にとっては一度限りの実習であっても、年々集積されることにより長期にわたる資料となっていること、閉山後の資料の散佚により、他に殆どその実態を窺う資料が存在しない鉱山が多数含まれていること等から、一ヵ月内外の実習から得られたこれらの報告書は貴重なものである」¹⁰⁾

鉱業に関する研究を行うための一般的な基礎資料として、鉱山所在地の市町村史、各企業の社史、鉱山関連の雑誌をあげることができるが、実習報文は各鉱山における当時の生の情報を現在に伝えてくれる唯一のジャーナリズム資料とも位置づけられるであろう。

3. 表の見方

日本近代の鉱業系企業を研究対象とされている方には、表2を一瞥いただくだけで、その資料的価値と、利用方法をご理解いただけるものと思うが、蛇足とはわかりつつも、この表を見ることにより得られる情報について概略ふれておきたい。

一つ目は、表の列に注目する方法である。特定鉱山に注目し、表を縦にながめると、単一大学では飛び石にしか揃わない「実習報文」が、複数大学で相互補完することにより経年的に網羅できることがわかる。特に全国の主要鉱山においてこの傾向をみることができる。

二つ目は、表の行に着目する方法である。例えば、鉱山経営においてメルクマールとなる年度に着目した場合、同じ地域における別企業（財閥）による差異や、同一企業（財閥）の地域による格差、あるいは同一業種（例えば銅山など）の地域的、もしくは企業（財閥）的相違点などを読み取るための、資料の所在が容易に把握できる。一例をあげると、住宅改良の一環である社宅の内壁の仕上げについて、東京大学1916年の三菱鯉田「実習報文」では「社宅八綺麗ニシテ瓦葺白亜用フ（中略）附近他坑ノモノニ比シテ優レタル」とあり¹¹⁾、漆喰塗りの白壁に言及した社宅の改善を読み取ることができるが、同じ三菱の槇峰銅山では東京大学1920年の「実習報文」に「粗悪ナル家屋」・「室内八概ネ不潔ニシテ汚物散乱ス」とあり、鯉田の社宅施設がとりわけ充実していたことがわかる。ちなみに、槇峰のその後の改善については、九州大学1937年「実習報文」に「衛生思想モ亦一般ニ普及サレ下水塵焼場便所等ノ衛生設備完備シ」と記述されている。

三つ目に、一つの枡（セル）に着目する方法である。これについては、「実習報文」を実見しないことには、その有効性を確かめることはできないが、例えば、ある大学の「実習報文」には社宅街を含めた詳細な配置図（「実習報文」では「坑外図」と表記）のみが合綴され、別の大学では実習生による写真が添付される。さらに他の大学の「実習報文」には「鉱山管理」の項目で社宅政策に関する記述が詳細に報告される、といった具合である。報告年と実習年度に若干の食い違いもあるので、前後併せて数年分を精査できれば、その鉱山の特定時点の状況を詳細に把握することが可能である。

学生の報告であるが故に「実習報文」に書かれた情報は精粗が大きいことは事実である。特に社宅および社宅街の記述は、学生個人の関心が如実に現れる項目でもある。一方、プラント（工場や生産システム）に関しては確実に一定水準以上の資料が揃う。科学技術史、産業考古学的視点からも一級の資料であるといえる。また、日本近代史の視点からは労使関係の基礎資料となりうるし、経済史的視点からも、その時々における各鉱山の盛衰を追うことができるなど、多方面の分野から、様々な基礎資料としての利用価値、存在価値を指摘できる。

おわりに

「実習報文」は、鉱業系企業を研究対象とするものにとって非常に資料的価値が高いものであると、今回提示した「実習報文」一覧表を作成して改めて実感した。表の見方、利用価値は三者三様であろう。この表を利用される皆さんの道標の一つになれば幸いである。

なお、大阪大学、九州工業大学、ならびに九州大学冶金学科の「実習報文」については、我々は未だ実見していない。加えて、ソウル大学図書館に京城帝国大学鉱山学科の「実習報文」の一部が所蔵されていることを確認している。1951年以降の分を含めて、「実習報文」の閲覧・整理・分析を現在、画策中である。

注

- 1) 本稿では「実習報文」と表記するが、大学や年度によってその表記は異なり、「実習報告」としている場合もある。
- 2) 秀村選三ほか編『九州石炭礦業史資料目録』(財)西日本文化協会)は第12集まで出版されている。出版年は1975年～1986年。
- 3) 実習年度は3年次が多いが、大学や時代により異なり、複数の鉱山で実習を行なう学生もいた。
- 4) 同一鉱山でありながら、報告と付図で冊子を分ける場合もあるが、この場合は併せて1冊と数えた。
- 5) 九州大学1916年の伊田炭坑の「実習報文」の「後藤寺の合宿が一間位空いているかも知れないからあちらに行って庶務の方に話に御覧なさい」という記述から、必ずしも事前に宿泊が約束されていた訳ではないようである。
- 6) 北海道大学1941年の国富炭坑の「実習報文」には「採鉱見学後、加勢先輩の有益な話があった。それは、鉱山に努める者の待遇改善といふ事であつた。これは政府がもう少し認識をあらためる必要があるとのことであつた。而らざれば鉱山に来る人がなくなってしまうという事であつた」とある。
- 7) 北海道大学1950年の三井砂川礦業所「実習報文」に「昭和12年7月改訂」として掲載されている。
- 8) 九州大学1950年の三菱高島礦業所端島坑「実習報文」に掲載。
- 9) 山口廣「蒲田の「吾等が村」……黒沢貞次郎の工場村」(山口廣編『郊外住宅地の系譜 東京の田園ユートピア』鹿島出版会、1987年、pp.109-118)、砂本文彦「鷲尾勘解治と新居浜・住友山田団地について」日本建築学会計画系論文集、第519号、1999年、pp.271-278、中野茂夫「工業系企業の産業基盤整備が近代地方都市の空間変容に及ぼした影響～倉敷紡績と都市・倉敷の関係を事例に～」日本建築学会計画系論文集、第544号、2001年、pp.273-280など。
- 10) 「九州大学工学部採鉱学科学学生実習報告(及び卒業論文)目録」(『九州石炭礦業史資料目録』第6集、(財)西日本文化協会、1980年、p.10)。
- 11) 加えて「而シテ其位置モ大ニ注意セルモノノ如シ 高燥閑雅常二日光ヲ浴ビ住心地ヨキ様ニナセリ」と、立地条件についても触れられている。

協力：谷村仰士(広島国際大学 助手)
崎山俊雄(秋田県立大学 助教)
中野茂夫(筑波大学 研究員)

執筆者所属：池上(北海道大学 助手)
砂本(広島国際大学 助教授)
中江(神戸大学 助手)
角(秋田工業高等専門学校 助手)